



ハンガリーで30年前に出会った奇跡 版画と陶芸の世界



台湾・台北市の美術館（櫻桃樹下現天堂）での様子（写真提供：アグネス・フスさん）

千曲市
版画家

若林 文夫さん

Fumio Wakabayashi

陶芸家

アグネス・フスさん

Agnes・Husz

2019年10月26日から12月30日の約2カ月間、台湾・台北市の美術館で Agnes Husz & Fumio Wakabayashi 展が開催された。あらかじめ日本から運んだ作品もあるが、台北市のアーティスト・イン・レジデンス（招聘作家のための制作や住居）で制作した作品が数多く展示され、海外での制作や展覧会に合わせて国立台北教育大学（National Taipei University of Education）で開催されたワークショップなど、台湾での時間は刺激に満ちていたと話してくれた。千曲市

版画家半世紀超
陶芸家30年を経て



台北の美術館が用意したアーティスト・イン・レジデンス（Cloud Forest Collective 国際陶芸スタジオ）で作陶した作品

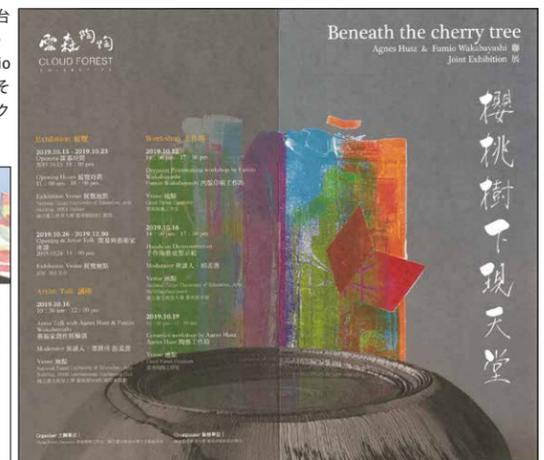


千曲市のご自宅兼アトリエで。お互いをリスペクトしているからこそ生まれる呼吸が心地いい。アグネスさんは若林さんの地元である上山田の地をこよなく愛する



台北の美術館でセッティング中の若林さん

2019年10月26日～12月30日、台湾台北市の美術館（櫻桃樹下現天堂）で行われた「Agnes Husz & Fumio Wakabayashi展」のフライヤー。それぞれの作品が響き合い、ワクワクする気持ちが抑えられなくなる



台北で制作したときに、窯に入れた「重曹」の効果で、今までとは全く違う風合いが現れたと教えてくれるアーグネスさん。中国茶をどうぞと淹れてくれる。口元にふっと馴染む素敵な茶器



ご自宅兼アトリエ。若林さんの版画を制作する部屋とアーグネスさんが作陶する部屋の真ん中にリビング。おふたりの作品が心地よい調和をみせる

フライヤーにも使われている若林さんの木版画の新作。台湾のお客さんたちを歓喜させた



今回は招待作家としておふたりが出掛けたので、アーティスト・イン・レジデンスが用意され、作陶を現地で心置きなく行えた



画業半世紀を超える若林さんは、銅版画を中心に作品創りを行ってきたが、台湾での出品作品には木版画の作品が多く展示された。「今まで銅版画ばかり手掛けて来たんだけど、長野市と上田市で版画教室の指導を頼まれて教えていたんです。生徒さんが見て、銅版画ばかりしてきた私でしたが、その熱意に惹かれ手掛け始めたら……。ハマっちゃった（笑）って言うのかな。銅版画で線を描くのと、木版画で描くのとでは、木版画の方が手が掛かるの。それがワクワクしてね。台湾の展覧会があった

本質は変わらない 見方を変えることが大切

ってその束縛が解き放たれるのです。台湾では焼いている途中の窯の中に「重曹」を散らししました。今までにない仕上がりになり興奮しました。神秘的な色が誕生した瞬間です。海外でも高い評価を得ているアーグネスさんの作品創りへの探究は留まることを知らない。

アーグネスさんの作陶は独特だ。捏ねた土を板にし、そこに筆で先に模様を描く。そして、それを薄く帯状に伸ばしていくと、模様が濃くなることや、ひび割れ新しい模様を生み出すところ、土の色と絵の具の醸し出す絶妙な色合いが美しい。「世界でワタシひとりしか、この手法（帯）で作品を創る人はいません。帯は束縛。焼くことによ

上山田出身の版画家・若林文夫さんが大学卒業後、1990年に招待作家として渡ったハンガリーで行われたシンポジウムでアーグネスさんと出会ったことから始まる、ふたりの奇跡と軌跡。既に出会った頃には、ハンガリーで新進気鋭の陶芸家としてアーグネスさんならではの「渦巻き」で注目されていた。来日したのは3年後の1993年。「Fumio」と出会わなかったら日本でこれほどまで長く活動を続けていなかった。そして、もし東京在住だったら同じこと」と、アーグネスさん。若林さんの出身地である上山田をこよなく愛している。



若林さんの2019年の新版画、アーグネスさんの台湾初体験の“重曹”を振りまいた茶器。左上にある窓の向こうがアーグネスさんのアトリエ。お互いの気配を感じながら制作に没頭する。何とも素敵な作家夫妻の日常



2018年5月19日～6月17日に多摩美術大学美術館で開催された展示の様子がまとめられた「宇宙に訊ねよ-ミュオグラフィが透視する科学と芸術の出会い ミライ-」。アーグネスさんは新しい試みとして、映像と展示のために作曲された音楽に作品を投影するという幻想的なシーンを創り出した。ミュオグラフィとは、1000万年の旅で地球に届いた宇宙が大气に衝突して生まれる素粒子「ミュオン」を観測する先端サイエンス

少しずつ伸ばしていくことで幅が長さに変わっていく



筆の色合いがだんだんと変化していく。ひび割れていったり、波打ったり、不規則な線が生まれる。土の中の物質が伸ばすことで構造が変わり、作品に透過していく



アーグネスさんのアトリエ。顔料で土に色をつけ、作品に合わせてカット



束縛の世界を創り出す“帯”。ここから、新しい命が吹き込まれていく



器の場合は、クルクル巻いて型を作っていく

profile

若林 文夫

千曲市上山田生まれ。1966年武蔵野美術大学日本画科卒業。福田豊四郎氏に師事。83年帰郷し、旧更埴市に版画工房を開く。現在は制作のかたわら、長野市と上田市で版画教室を開催。生徒一人ひとりの特性を引き出すレッスンに定評がある。信州版画協会会長。

profile

アーグネス・フス

1991年ハンガリー国立美術工芸大学陶芸科修士過程修了。1993年より千曲市上山田にて制作。渦巻きの世界は独自のもの。2015年エジプト国際陶芸シンポジウムをはじめ、フィンランド、ハンガリー、台湾など海外でも高い評価を得ている。

2020 Schedule

- 【アーグネス・フスさん】
- 展3月19日(木)～
- アートフェア東京のサテライト exhibition 国立科学博物館 (東京・上野)
- 展10月14(水)～10月20日(火)
- 池袋西武(東京)
- 展12月17日(木)～12月23日(水)
- ながの東急百貨店(長野市)



ハンガリーで30年前に出会った奇跡。第一線で活躍し続ける原動力はリスペクトと愛



台北の美術館での出展作品

こともあるけれど、2019年に新作を何枚も完成させました。でも、本質は変わらないんですよ。“見方”が変わったんですよ”と、愉しそうに言う。

アーグネスさんの作品展には若林さんの深い色合いの銅版画が似合っていたが、若林さんが新たに手掛けた木版画の明るくて軽快で気持ちのいい色合いにアーグネスさんの作品が響き合う。2020年も国内外を舞台に月単位で展示会やワークショップなどが目白押しのおふたり。時に、徹夜をし朝方を迎えることがあるほど忙しいと笑うが、リスペクトし合うその先に進化を続けるアーティスト夫妻のカタチがあった。